

立原道造全集

第六卷

立原道造全集

第六卷

雜纂

立原道造全集

第6巻

雑纂

1973年7月30日 初版発行

著者 立原道造

発行者 角川源義

印刷者 中村武

製本者 鈴木俊一

発行所 角川書店

東京都千代田区富士見2の13の3郵便

番號102 TEL 東京(265)7111(大代表)

振替東京 195208 信教印刷・鈴木製本

亂丁・落丁本はおとりかへいたします

目次

後期拾遺詩篇

メヌエツト

一〇

戯曲

或る朝の出来事

一五

短歌

硝子窓から

三

「學友會誌第五三號」より

五

鴉の卵抄 (一)

六

「學友會誌第五五號」より

三

鴉の卵抄 (二)

五

「校友會雜誌第三三二號」より

六

「詩歌第一二卷第七號」より
鴉の卵抄 三

「詩歌第一二卷第八號」より
四

「詩歌第一二卷第九號」より
四

「詩歌第一二卷第一〇號」より
四

「詩歌第一二卷第一一號」より
四

「詩歌第一二卷第一二號」より
四

Uta 四

「詩歌第一三卷第二號」より
四

青 空 四

「校友會雜誌第三三五號」より
五

「詩歌第一三卷第三號」より
五

『詩歌年刊歌集 一九三二年版』より
五

「詩歌第一三卷第五號」より
五

「詩歌第一三卷第六號」より
五

窓 五

「ゆめみこ第四號」より
五

「ゆめみこ第八號」より
五

俳句

「句帖第一卷第二號」より

「句帖第一卷第五號」より

五 五

詩ノート（*印は仮題）

「代數ノート」より

昭和八年ノート*

昭和九年夏ノート*

三 七 九

小品・感想草稿篇

即興（I～III）

一年を顧みて

彼は、いつも*

二十二日の朝*

草に蔽はれた道*

三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三

省線で*

聞書・其一

皺のことや*

時計

僕のまはりでは*

待つてゐても*

出發

「浅間山麓に位する

藝術家コロニーの建築群」付言

鉛筆・ネクタイ・窓（I～III）

初期ノート

「幾何ノート」より

「三年英語ノート」より

自選 葛飾集 山木祥彦第一歌集

文集ノート*

「㊦70手帳」より

自選 兩國閑吟集 山木祥彦第二歌集

二五

二四七

二四八

二五三

二五三

二五

二五

二五

二五

二五

二六三

二六三

二六四

二九六

三三

三六

その日その日 昭和五年日記*

三五四

「水晶簾」詩稿 山木祥彦自選第一詩集

四二〇

「英語熟語ノート」より

四二六

「英作文ノート」より

四四七

「四年英語ノート」より

四四九

「Miscellaneous ノート」より

四五五

「The science of wealth ノート」より

四六〇

「小型スケッチ・ブック」より

四六一

「詩集クラブ・ノート」より

四六四

「一九三六年手帳」より

四六五

下書き草稿篇

僕は冷い草の上に*

四七〇

別れ……秋

四七〇

今になつて爪を噛まうと*

四七〇

海には波は*

四七〇

母は呼びつづけた*

四七一

雲の唄

四七一

やがて秋……（初稿）

また晝に（初稿）

帆・ランプ・鷗

どうして 不意に*

太陽は空の中心にかかる*

SCHERZO

夕映えが 殒落を*

私から 奪はれた*

山の色は*

美しい月の夜*

言葉もなく 私の*

おまへは 私を求めてゐるが*

それはかへつて*

夢が花のやうになり*

この美しさに 沈黙*

とほくの空で*

夕映えばかりをのこして*

四七三

四七三

四七三

四七三

四七四

四七四

四七七

四七八

四七九

四七九

四七九

四八〇

四八〇

四八〇

四八〇

四八〇

四八一

拾遺書翰

四八三

座談會

現代詩の本質に就て
『測量船』に就て

四九四
五〇二

解説

五〇八

編註

五二三

草稿整理表

五六一

年譜

五七三

故立原道造藏書陳列會案内

六五六

詩索引（詩題と歌い出し）

六六三

後期拾遺詩篇

メヌエツト

やさしい鳥 やさしい花 やさしい歌

私らは 林のなかの 一軒家の

にほひのよい春を 夢みてゐた

鄙びた 古い 小唄のやうに

青い魚

光る果實

ながれる雲 星のにほひ

ちひさい炎

風が 語つて 忘れさせてゆく
淡い色のついた春を 夢みてゐた
ひとつの 古い 物語のやうに……

夜窓の星と 置洋燈の またたきが
祝つてくれた ひとつの ねがひ
優しい鳥 優しい花 優しい歌

戲 曲

